

文安・宝徳期の武家歌壇

能登守護畠山義忠と正徹

酒井茂幸

The Warrior World of Poetry during the Bunnan and Hotoku Eras : Shotetsu and the Noto Shugo Harakayama Yoshitada
SAKAI Shigeyuki

はじめに

- ① 田中本『鷹歌等』の書誌と所収資料
- ② 「賢良高野山参詣路次和歌」の成立と周縁
- ③ 畠山義忠の歌会主催と幕府歌会参加
- ④ 「畠山匠作亭詩歌」の成立と人的構成
- ⑤ 「畠山匠作亭詩歌」出詠の五山僧と賢良
- ⑥ 「畠山匠作亭詩歌」から『瀟湘八景歌』へ
おわりに

【論文要旨】

本稿は、近時、伝存が明らかになった、国立歴史民俗博物館蔵田中稔氏旧蔵『鷹歌等』所収「住吉 玉津島 高野山へ賢良御参詣時於路次人々」(内題、本稿では「賢良高野山参詣路次和歌」と仮称)を中心に、能登守護畠山氏の義忠(法名賢良)の主催した歌会の作者圏を調査し、歌会に集った公・武・僧の歌人達の階層や構成を探究したものである。

田中本『鷹歌等』は、未整理の歌稿を書き抜いた歌群中に正徹の新出歌が一〇首含まれるなど、正徹関係の資料が多い。しかし、正徹の他撰家集『草根集』の編纂に近い段階の歌稿の抜書の転写であり、扱いには注意を要する。「賢良高野山参詣路次和歌」も、そうした一連の資料群に含まれるが、外部徴証から成立年次は文安三年(一四四六)を軸とする前後三、四年と推定される。本歌会の出詠者が正徹と堯孝の門弟格の歌僧に限られるのは特筆される。賢良が主催した歌会で独立した伝本が残るの

は、他に「畠山匠作亭詩歌」と『瀟湘八景歌』があるが、いずれも歌道家や守護大名を中核に作者が構成されている。「畠山匠作亭詩歌」を基準に、義忠(賢良)の主催した歌会の出詠者を、『草根集』や『堯孝法印日記』などをもとに比較すると、幕府に直勤した奉公衆・御供衆などの武士階層が出家遁世し歌人として活躍しているケースも見出される。これは、専門歌人の門弟筋に限られた「賢良高野山参詣路次和歌」とも異なる人的構成である。

『畠山匠作亭詩歌』と『瀟湘八景歌』からは、賢良の五山僧との親密な交友圏が知られ、賢良は歌人と五山僧が一堂に会する雅会の後援者の役割を担っていたと推測される。『草根集』には、歌会催行記事が確かに目立つが、漢詩と和歌がセットとなった雅会も催されている。賢良主催の歌会では、階層や歌道流派を超えた文芸の「場」が機能していたのである。

はじめに

正徹の家集である『草根集』巻二・一七三四―一七三七番歌に、永享四年（一四三二）三月に、自邸の草庵が焼失した折、能登畠山氏の祖、畠山満慶の二男で在京守護の義忠が慰安に訪れ、三十首歌を詠んだ記事が見える。

卯月二日夜、中務大輔（山名持照）の家にとまり侍るに、夜半ばかりに今熊野、草庵本坊の類火に焼侍るよし、曉告来しかども、かひなき事にてぞ侍し、愚老廿歳の年よりよみをきし歌二万六千首、三十余帖にかきをきしも、一ものこらず、惣て和歌抄物、自筆秘口伝等、かずをつくしむなしき煙となし侍りぬれば、今は此道無益におぼえて、ながくとまり侍るべきよし思なりぬるを、とてもほどあるまじき年のすゑなれば、わづかにあらむかぎりは、などかは心をもなぐさめざらむなど、すゑらるゝ方も侍るに、げにもとよりあとなきうたかたの、しばしのほどをとかく思も、中々執心あるかたとおぼえて、其後もいけるかぎりのなぐさめには又なにをかはとてまじろひ侍る、返々もはかなくおぼえ侍る、同八日、阿波守（畠山義忠）の家にてなぐさめらるゝ事にて、人々三十首すゑらるゝなかに

嶺上新樹

つくばねやしげればいとみなの川嶺よりおつる音（三字分空白）して

眺鷗川

うかひ舟此瀬ばかりとよこ雲に月をかくして簪さす也

初恋

露分ておもひ入野の初尾花いつしかよそにぬるゝ袖哉

海

かきとめて煙となしぬもしほ草さても跡なき筆の海哉

永享四年に正徹は五二歳であった。よって、詞書の「愚老廿歳の年よりよみをきし歌二万六千首、三十余帖にかきをきしも」の記載は、正徹自筆とされる香川県（1）の常徳寺蔵『永享六年正徹詠草』のような日次家集が、正徹二〇歳の応永七年（一四〇〇）から年次ごとに一帖ずつ整理・清書されていたことを示す。『草根集』は巻二が永享年間の日次家集であるが、永享三、七、一二の各年のまとまった日次詠草は存在せず、正広が『草根集』を編纂した時期に既に散佚していたものと思われる。また、前掲『永享六年正徹詠草』のように独立した日次家集は、永享五年（天理大学付属天理図書館蔵）と永享九年（大東急記念文庫蔵）のものが存する。（2）これらの詠草と『草根集』の日次歌群を比較すると、前者の方が所収歌が豊富で内容も充実しており、後者は、断簡を綴り合わせた歌稿に留まるとされる。（3）

近時、伝存が明らかになった（4）、国立歴史民俗博物館蔵田中穰氏旧蔵『鷹歌等』（以下「田中本『鷹歌等』」乃至は「鷹歌等」と略称）に合綴される正徹の作品には、「住吉 玉津島 高野山へ賢良御参詣時於路次人々」と内題が記される歌会詠（以下「賢良高野山参詣路次和歌」と仮称）がある。さらに、未整理の詠草が抜書された歌群中に正徹の新出歌が一〇首含まれていることが判明した。殊に、「賢良高野山参詣路次和歌」は、本稿冒頭に掲出の、永享四年三月の草庵焼失に際しての正徹慰問の歌会を開いた畠山義忠（法名賢良）が主催した歌会である。賢良と正徹の交際関係、賢良の文学事蹟、そして彼を取り巻く歌人の交友圈などに関して新知見を提起させる好資料である。また、北山文化の担い手とされる（5）、守護大名層の和歌・漢詩等の文芸活動の精査も、学際的な視野から積み重ねられるべき作業であろう。

本稿では、まず、「賢良高野山参詣路次和歌」を中心に、田中本『鷹歌等』の書誌的事項を押さえ、合綴される資料について討究する。そして、守護大名の賢良がこうした歌会を催行した経緯と実態、及びその背景の人的ネットワークについて考察する。また、賢良が主催した『畠山匠作亭詩歌』と『瀟湘八景歌』（いずれも国立歴史民俗博物館蔵高松宮家伝来禁裏本〔以下「高松宮本」と略称〕に存する⁽⁶⁾）に関して、賢良と正徹、五山僧との繋がりを叙述する。

① 田中本『鷹歌等』の書誌と所収資料

まず、田中本『鷹歌等』の書誌を、前掲『田中穰氏旧蔵典籍古文書目録「国文学資料・聖教類編」』に依拠しつつ略述する。

函架番号H—七四七—八五。仮綴・一冊。緑色の紐を結び合わせ紙縫とする（後補）。縦二三・二×一七・二糎。低粉色の本文共紙の表紙。左肩に直書で外題「鷹歌」。中央に田中教忠によると思われる白地の題簽「詠鷹歌百首拔書 藤原貞俊卿／詠鷹歌拔書 修理大夫実時朝臣／詠鷹古歌拔書／詠百首和調 釈正徹／和歌制の言葉／住吉玉津島高野山へ賢良御参詣路次人々詠歌」あり。見返しに田中教忠の蔵書票あり。墨付一九丁（共紙表紙を含む）。半丁一一―一五行。本文料紙は楮紙。虫損甚だしく、後人による裏打補修が施される。内題（番号は後述の所収資料一覽に対応）、①「詠鷹百首和調」、③「詠百首和哥 釈正徹」、④「詠歌一体云此比人のよみいたしたらん詞更二よむへからす」⑦「住吉 玉津島 高野山へ賢良御参詣時於路次人々」、⑨「二〇一日於高雄二楽軒（稿者注、飛鳥井雅康）。奥書・識語等なし。〔室町末期写〕」。

次に、所収の和歌資料を一覧にした上で、概説を加えてみよう（一覽は、原則として内題、及び位置に拠った。内題を欠く資料、及び「賢良高野山参詣路次歌会」は、便宜上「」により仮題乃至略称を付した）。

- ①「詠鷹百首和調／藤原朝臣貞俊卿」（二丁表―三丁表）
- ②「詠鷹歌拔書 修理大夫実時朝臣」（三丁表―六丁裏）
- ③「詠百首和哥 釈正徹」（七丁表―一〇丁裏）
- ④「詠歌一体云此比人のよみいたしたらん詞更二よむへからす」（一二丁表―一三丁裏）
- ⑤「夫木和歌抄秋冬和歌拔書」（一四丁表―一四丁裏）
- ⑥「清岩・正暁・持孝・雅親の詠草断簡」（一五丁表―一五丁裏）
- ⑦「賢良高野山参詣路次和歌」（一六丁表―一六丁裏）
- ⑧「永享元年二月「聖廟法楽百首和調」恋部拔書」（一七丁裏―一七丁表は白紙）
- ⑨「二〇一日於高雄 二楽軒」（一九丁裏）

この中で、正徹関係の資料は後に一括して調査結果を述べることにし、まず、①②④⑤⑨の内容を略述する。①と②は鷹歌の拔書集成である。鷹歌とは、鷹狩用の鷹の育成・使用について教訓する歌であり、室町期に多く作られた。鷹歌の多くは、作者が藤原良経、定家、慈円、西園寺公経、実兼らであるが、いずれも疑わしく仮託であろう⁽⁷⁾。西園寺家と鷹歌の関わりは、公経・実兼の詠とも伝えられる『鷹百首』が存し⁽⁸⁾、実兼の代にも続いた。よって、①「詠鷹百首和調／藤原朝臣貞俊卿」も、西園寺家嫡流で、西園寺公宗男の貞俊に仮託した作品であろう。伝貞俊の鷹百首は従来知られておらず、新出資料であるが、四八首のみの抜書である。②「詠鷹歌拔書 修理大夫実時朝臣」は、「修理大夫実時朝臣」の位置が端書され、正親町公蔭男（尊卑分脈）の正親町実時の詠が一四

首ある。次に、慈円詠三首が存し、その後に鷹を詠み込んだ古歌や『堀河百首』の「鷹狩」題の和歌の抜書などが続く。中途に実時詠が八首含まれる。④「詠調一体云此比人のよみいたしたらん詞更二よむへからず」は、藤原為家の著『詠歌一体』の、禁制詞に関する部分のみを後人が増補した歌学書で、一般に『詠歌一体』丙本と称される。⑤「夫木和歌抄秋冬和歌抜書」は、『夫木抄』の秋・一・二・三・四、冬・一・三、雑一からの一八首の抜書である。⑥「二〇一日於高雄 二楽軒」は、飛鳥井雅康が「高雄」と「梅尾花下」において詠んだ五首である。虫損のためよく判読できないが、内題に「二〇一日」とあることから、日次詠草の抜書か。なお、雅康の部類家集である『雅康詠草』（大阪市立大学学術情報総合センター森文庫蔵、『私家集大成 中世Ⅳ』所収）とは一首のみ一致する。

さて、『鷹歌等』には正徹関係の資料が多く含まれるが、その前に正徹の『草根集』の編纂と成立について略述しておこう。^⑦『草根集』は正徹の門弟の正広により編まれた他撰家集である。総歌数一一二三六首（宮内庁書陵部（五一〇—二八）本に依る。『私家集大成 中世Ⅲ』所収）を所収する。また、一条兼良の序文に「時に文明五のとし文月のすゑつかた、桃華の三関禅人これをしるす」とあることから、文明五年（一四七三）の七月の成立とされる。しかし、これは飽くまで序文が付された完成形態の成立の年次である。国立公文書館蔵旧内閣文庫蔵一五冊本が正徹の段階の歌稿の面影を留め、尊経閣文庫蔵本や島原図書館肥前島原松平文庫蔵本には、正広の編纂・補訂の跡が見られる。だが、前者は巻十五を持たず、後者は完本を伝えない。これに対し、宮内庁書陵部（五一〇—二八）本には、前述の三本に比し整理・加除・補筆を施した痕跡が幾つか存する。すなわち、巻一の定数歌に付せられていた「千松末葉釈正徹」「釈正徹」などの署名を削り、序文の「招月庵清嚴正徹」を「正徹老人」と改めている。そして、巻四末尾の歌順の整理傾向や巻六の恋・雑両部の大幅な歌順整理の様態、そして巻十四末尾の正徹死去記録の整備

など、歌集としての体裁を整えようとしている。ただ、正徹死去は長祿三年（一四五九）であり、正広は『草根集』編纂に着手した段階では、正徹が生前手元に集めていた年次ごとの日次詠草の大部分は、散佚していた可能性が高い。少なくとも、永享四年（一四三二）以前の歌稿が草庵焼亡により失っている（前述）。こうした『草根集』編纂の事情や経過を踏まえ、『鷹歌等』所収の正徹関係資料を以後見ていこう（賢良高野山参詣路次和歌）に限り次節で詳説。

③「詠百首和歌 釈正徹」は、『草根集』には、端作り題に「住吉社法楽詠百首和歌 一日中三時」とある。『鷹歌等』所収本文と比較すると、『草根集』には、「住吉社法楽」「一日中三時」の記載と「釈正徹」の位署が無い。これにより、当該の百首和歌が『草根集』からの抜書ではなく、同集編纂以前の段階の原型を留める詠草からの転写本であることが判明する。そして、『草根集』当該歌群の末尾には「自文安六年三月廿三日参籠侍 住吉神前、一日三時詠之、自廿四日夕方十五首詠、廿五日依他事一向不詠、廿六日六十首詠之、廿七日廿五首詠終、彼是一日三時百首也」とあるが、『鷹歌等』所収本文では、「文安六年三月廿八日奉納 神殿百首一日三時」とあり、奉納の日次が記されている。同資料が、元来は法楽百首の独立伝本であったことを示唆する。^⑧なお、奉納が二八日なのは、二七日に詠み終えてから、清書や副本書写に一日かかったためと思われる。実は、正徹段階の歌稿の面影を留めるとされる、前掲の国立公文書館蔵旧内閣文庫蔵一五冊本の第一冊は、これより前の「祇園社法楽詠百首和歌」で終わっている。恐らく、正広は『鷹歌等』所収「詠百首和歌 釈正徹」の祖本を、『草根集』の編纂途上の歌稿蒐集で見出し、端作りや跋文に家集本文に適合するよう加除を施し、『草根集』に収めたのであろう。なお、『草根集』との間で和歌本文に大きな異同は無い。『草根集』の巻一には、「住吉社法楽詠百首和歌 一日中三時」のような定数歌が一三種配列され、一部は独立伝本として伝わる。^⑨従来、「住吉法

楽百首和歌」の独立伝本の伝存は知られておらず、ここに『鷹歌等』所収「詠百首和哥 釈正徹」が新たに発掘されたのである。

⑥「正徹・正眺・持孝・雅親の詠草断簡」は、正徹歌に『草根集』未収歌が存し、『草根集』編纂時に正広の手元に集まらず、看過された詠草からの抜書であろう。それぞれの歌数を記すと、正徹一三首・正眺三首・持孝一首・雅親九首である。正徹歌に限り精査すると、正徹の『草根集』と一致するのは冒頭二首と巻末一首のみである（「清岩」は正徹の道号である）。以下に『鷹歌等』所収の本文を掲げ、『草根集』との異同を記す（私に清濁を区別した。以下同様）。

（十四日、恩徳院歌合に）

野雲雀

影清き野守のかゝみおりくにくもるはあがるむらひばかりかも

正徹（九七七六）

（十三日、平頼資すゝめし統歌の中に）

旅宿

かよひてし夢のたゞちも旅なれてさぬるこよひはふるさともみず

同（八五一七）

廿九日、治部大夫の家より、釈あ影をか、せ、定家卿のごとく賛をすべきよしありしに、読てかきつかはし侍き、円寂の、

ちにきけば、ゆいごむありて、龕にいれられきとなり

俊成卿影賛 九十賀

つむとしのみてるをいはふ九十たぐひまれなる花山の雪

清岩

（七六八七）

「野雲雀」詠は、『草根集』卷十三の日次歌群の内、長祿元年（一四五七）五月一四日の詠、「旅宿」歌群は同じく卷十一の享徳二年（一四五三）の

四月一四日の詠、「俊成卿影賛 九十賀」は卷十の享徳元年の八月二九日の詠である。歌順や詞書が『草根集』と一致しないことから、正広の目に触れなかった未整理の歌稿が抜書のもとになっていることは確実である。ここで、『草根集』他に見出されない正徹の新出歌一〇首をここで掲出しておこう。

夏涼

みそぎ川たがゆふしでぞ夕浪に白たへなびく庭の玉もは 正徹

夏枕

さ夜かぜや夏ともしらず手枕のすきますゝしきうたゝねの床 同

夕落花

春のきてうきをなぐさむ花ぞちるいまより後や秋のゆふ暮

山冬月

すむ影は浪まにおちてみな河岸よりこほる冬の夜の月

逐日雪深

行かへりみちふみわくる都だに昨日の雪のあとみえぬまで 清岩

春已上洛

としのうちにかすむ外山やくる春のしばしやすらふやどりなるらむ

海辺眺望

あさをぶねこぎはなれゆくなみのうへにみゆるこじまのみねのしら

雲

初花

日をかさねはやたちかけよはるのきるはつ花ぞめのみねのしら雲、

帰雁

空にたつかすみのそでのみなとぶねこぎとゝめぬや春のかりがね、

忍恋

しるといふ枕も人につゝみてや恋すてふ名のたつとしもなき、

⑧「永享元年一二月「聖廟法楽百首和詞」恋部抜書」は、『草根集』卷一所収の「正徹聖廟法楽百首」の恋部から一二首を抜書した資料であり、位署に「清岩」とある。「聖廟法楽百首和詞」は、独立伝本が天理大学付属天理図書館・駒澤大学図書館・東京大学文学部日本文学研究室・香川県善通寺本坊に蔵される。⁽¹³⁾『鷹歌等』所収の本文には、特定の伝本と合致する異同は無い。だが、位署「清岩」の存在は、少なくとも『草根集』編纂の前の段階の独立伝本からの抜書であることを想察させる。

このように、『鷹歌等』所収の正徹関係資料は、いずれも『草根集』からの抄出ではなく、同集編纂以前の段階の歌稿や詠草の抜書であった。ただ、書写年代が室町末期に下るため、あくまで歌稿断簡の転写本として所収歌の本文を扱う必要がある。そして、こうした歌稿の抜書の中に、新出資料「賢良高野山参詣路次和歌」が含まれていたのだ。次節では、以上の『鷹歌等』所収資料の検証と位置付けを踏まえ、「賢良高野山参詣路次和歌」を紹介・精査する。

②「賢良高野山参詣路次和歌」の成立と周縁

まず、やや長いが全文を翻刻した上で、詠歌状況を叙述し、出詠者について略述する。

住吉 玉津島 高野山へ賢良御参詣時於路次人々

進発舟中にて

旅ごろもうらゝにはるゝ朝だちに月はかすみて在明の空 堯孝
月のこるかすみも空にあさだつやはれゆく旅のみちをしるらん 正徹

あり明の月はあさだつ衣手にゆくすゑちぎる春の旅人 賢良
たびごろもあさだつけふののどけきは空もうけひくみちぞしるゝ 常闇

しづかなる行すゑしるしかすみはれなきたるあさの在明の月 円雅
影ならぶたづがひとりたのまは旅だつ春の月をみましや 心恵
旅ごろもかすみの袖をたつ空も色あらはるゝ在明の月 正眺
舟くだす川瀬のなみをはじめにて行末遠き紀路のうみ山 常佐
たづもけふねがひをみつのとまりして今年の春は舟よそふ也 寿阿
影ぞなきかすみの袖はいづくまで今朝はつれにし在明の月 忠英

和哥浦の旅宿にて

わかのうらや一夜蘆辺のかり□□□^(枕方)又かたる夢をだにみん 賢良
和哥のうらのあしべのたづの毛衣をかりねの夢路又かさねばや 正徹
わすれじな海の浜藻を枕にて今夜かりねの和哥のうらなみ 堯孝
舟よするわかのうらはのあしべ寺かねは夢路のさはりなりけり 正眺

一夜ねしあしべをこゆるかたをなみ都のゆめにたちやかへらむ

月やしらむ一夜あしべのかり枕みちくるしほのこし、袂を 心恵
藤代にて 常佐
かへりみる浪ちにつゞく藤代の松のことはかきぞわづらふ 賢良

藤代やかゝるところはいづくにもなぎさの浜の玉つしま山 正徹
老のなみこえぬる身には藤代のみ坂をよそにみてぞ過にし 堯孝

藤代のふもとの浪をけふは又しる^{(の腕力(二)花方)}こと葉□□^{(二)方}やしくらん 心恵
ふぢしろの松のことはちりうせず又□□^{(二)方}のちのみさかをもみ^{(二)方} 常佐

坂のぼるけふのためとや藤代の松のことはおよばざるらん 寿阿

本資料は、畠山賢良（義忠）が堯孝・正徹・常闇・円雅・心恵・正暁・常佐・寿阿・忠英の九人の歌人を引き連れ、住吉・玉津島社、高野山へ参詣し、その船中や旅宿、路次で詠んだ歌会詠の抜書である。前節において検証したとおり、『鷹歌等』所収の正徹関係の詠草類は、『草根集』の編纂以前の段階の歌稿等の抜書であった。本資料も、完本からの抜書であり、「住吉（社）」における歌群が見えないことに鑑みると、「和哥浦の旅宿にて」「藤代にて」の歌群も、本来は「進発舟中にて」の出詠者一人全員の詠が揃っていた可能性が高い。また、旅程でより多くの名所に滞在し和歌を詠んだことも想定される。つまり、路次の旅程に沿って行なわれたと思われる歌会は、もう少し大きな規模であったことが窺知される。なお、『草根集』等の正徹の家集や詠草、及び正広の家集『松下集』に一致する和歌は見出されない。

畠山賢良は、俗名義忠、能登守護畠山氏の祖、満慶の二男である。堯孝は、南北朝期の二条派の頼阿の曾孫、堯尋を祖とする常光院の嫡流の歌僧である。正徹は本稿で問題としている冷泉派・招月庵流の禅僧である。常闇は、心敬の文明二年（一四七〇）成立の『ひとりごと』に「春日正三位入道常闇」と記される歌僧⁽¹⁴⁾、円雅は堯孝の愛弟子であり、常光院流において歌書の書写活動に功があったことで知られる。寿阿・常佐は、堯孝の門弟格の通世歌人と思われる。正暁⁽¹⁵⁾は正徹の子飼いの弟子である。心恵は連歌師の心敬と同一人物で、正徹の門弟であった時期がある（後述）。忠英は正徹門弟で畠山氏被官の井上忠英⁽¹⁶⁾か。

では、次に「賢良高野山参詣路次和歌」の詠歌年次を考証した上で、本資料の特質を述べてみたい。詠歌年次として最も蓋然性が高いのは、文安年間（一四四四～四八）である。というのも、畠山義忠が出家して賢良と号するのは、『看聞日記』嘉吉三年（一四四三）五月一日である（『看聞日記』同日条⁽¹⁸⁾）。これにより催行年次の上限が得られる。

次に根拠となるのが、堯孝の『堯孝法印日記』の記載である。『堯孝

法印日記』は、堯孝の文安三年（一四四六）正月から四月までの日次家集である。賢良（義忠）家の月次会始の参加者が左注に記される。一方、一色教親家の月次会始の陣容も注目される。まず、両者の月次会始詠の詞書と左注を中心に略掲する（『賢良高野山参詣路次和歌』と一致する人物に網掛けを付した）。

I（稿者注、文安三年一月）二十日、畠山修理大夫入道賢良家にて、

月次会始に

初春松

今日しこそ子日にかざせ春にひく心をたねの松のことは

（四五、以下五首略）

出題 飛鳥井中納言入道、読師同、講師宗硯、人数、飛鳥井、

亭主、一色左京大夫、正徹、春日三位入道、畠山次郎、円雅、

賢盛、常勲、心恵、正晃、忍誓、常佐、智蘊、宗硯、以下数

輩（以下略）

II（稿者注、文安三年一月）二十三日、一色左京大夫教親家にて、

月次会始に

竹遐年友

ことのはの花にもなびく千代のかげを窓に友なふ春のくれ竹

（五五、以下「当座五十首に」四首略）

出題予、読師同、講師智蘊、人数、修理大夫入道賢良、亭主、

正徹、春日入道常闇、沙弥周道三上入道、円雅、正晃、常勲

近藤入道、範盛三上右京亮、貞為、賢盛、智蘊、時阿、寿阿、

常佐（以下略）

一色教親は、山城・丹後・伊勢の守護大名で、畠山賢良（義忠）と同様（後述）に、足利義教の御相伴衆である。『草根集』にも自邸で歌会を催した

記事が見える。そして、教親家の月次会始の方が、「賢良高野山参詣路次和歌」の出詠者一人中八人が合致し、より近似する。『堯孝法印日記』によれば、教親家は二月から四月まで毎月、三首歌会と当座五十首歌会を行い、賢良家は四月のみ同様の二種の歌会を行っている。四月の両家の歌会の左注に「題者予、読師同、講師寿阿、人数如例（以下略）」（二六二～一七〇、傍線稿者、以下同様）「題者兼日飛鳥井中納言入道、当座予、読師同、講師寿阿、人数如先々」（二七一～一七九）とあり、出詠歌人が固定化していたことが分かる。「賢良高野山参詣路次和歌」出詠の堯孝・正徹とその門弟筋が文安三年に教親家と賢良家の歌会に出詠している事実は、両者の詠歌年次が近接していることを示す。

なお、『草根集』の巻一から巻三は、永享元・二・四・五・六、嘉吉二・文安四年の日次家集、巻四から巻六が詠歌年次不記の詠草、巻七から巻八までが宝徳元・二・三年の日次家集で、文安年間の詠は文安四年に限られる。

さらに、正徹と心恵（敬）との関係に着目すると、二人が歌会で同席した現存資料の初出も、『堯孝法印日記』の前掲Iの左注である。心恵（敬）は、従来、『ひとりごと』の「清岩和尚に三十年は日夜のことに侍しかども」、「所々返答」（第一状）の「三十とせの庭訓」に基づき、永享元年頃に正徹に弟子入りしたとされる。そして、『草根集』に名が初めて見えるのは、『草根集』巻八の宝徳二年（一四五〇）条の、

（稿者注、六月）廿四日、清水十住心院に権律師心恵といふ聖のかたにて、題をさぐりて

朝山霞

山風の霞をまくやさほ姫のおくるあしたの床のさ庭

（六四三三、以下四首略）

である。これ以後、『草根集』中の正徹と心恵の交際で、年次が判然としている事例は、宝徳三年一〇月に心恵から唐画軸物に賛の歌を依頼された記事のみである（巻九七・一七四番歌）。文安・宝徳期に心恵（敬）が正徹の門弟であったことを明示する資料に、心恵「所々返答」（第二状）中の心恵の自讃の記事がある。以下に本文を掲げよう。

拙者、かたはらいたき事どものうちには、先年清岩和尚判者にて、歌合会張行侍し、其比のむねとの好士たちにて、歌合の月次会、一年の内に一首も負の札侍らざりし。殊に、其年潤月にて十三ヶ月、其外三井寺仏地院にて、都より清岩和尚をはじめて皆々超給て、はれがましき歌合、彼は十四ヶ度四十二首、歌に、一首もまけ侍らず、此事を、今の招月庵正広、三位持孝已下にたびたび語り侍し。

この自讃は、四行目の「其外」により前半と後半に分かれる。後半の、三井寺仏地院の歌合で、十四か度二十首中無敗であったことは宝徳元年の頃と推定されている。⁽²⁰⁾前半の正徹判者の十三ヶ月間の歌合で、無敗を持続したとする件りも、「先年」の回想と一具のものとして解釈でき、宝徳元年に近い時期であったと考えられる。

正徹と心恵が歌会での同席が、宝徳二年以後確認されないことから、心恵の正徹判の歌合に頻りに参加し、両者の師弟関係が持続したのは、文安年間から宝徳二年頃までであったと考えられる。義忠の出家年次と合わせ、「賢良高野山参詣路次和歌」の催行年次もこの範囲に絞り込まれる。つまり、文安三年を軸とした前後三、四年の間の催行と推定される。「賢良高野山参詣路次和歌」の特質と資料的意義は、以下の四点に集約される。第一に正徹と堯孝双方の門弟が顔を揃えた歌会であること、そして第二に、その歌会の主催者が守護大名の賢良であったことである。すなわち、賢良（義忠）に当時の実力ある歌僧を一堂に集める統率力が

あったことが確認されるのである。第三に、『堯孝法印日記』等の記事と照合することにより、『草根集』に夥しく見出される賢良家の歌会の出詠者を推察できるところである。第四に、高野山へ詣でる途次に、いずれも和歌の守護神を祀った神社である住吉・玉津島の両社に、多くの歌人を引き連れ参詣した事実が明らかになり、賢良が、和歌を好んだ守護大名の中でも特に歌道に執心していたことが知られることである。

なお、玉津島社が鎮座するのが「和歌の浦」であり、「藤代」は、「坂」「み坂」が詠まれているように、藤代峠のことで、和歌の浦の南東に位置する。熊野街道の沿線である。

そして、「賢良高野山参詣路次和歌」は、出詠者が正徹と堯孝双方の門弟筋に限られ、歌道家や守護大名の人物が見えない。賢良の歌会に集った人々の階層や構成が、歌会の性格や目的により異なっていたことを示す。つまり、「賢良高野山参詣路次和歌」のように、正徹と堯孝、及びそれぞれの門弟のみが一堂に会する歌会は特異であり、こうした歌会を賢良が催行した意図や実際の機能の解明が新たな課題となる。賢良は、様々な階層やジャンルの雅会を主催しているため、『草根集』や『堯孝法印日記』に見える賢良主催の歌会に限らず、独立して伝存する大規模な歌会の催行基盤となった人的繋がり⁽²¹⁾の究明が必要となる。

次節では、まず、どのようにして賢良が正徹や堯孝らとネットワークを形成し、自邸における歌会に招くに至ったかを叙述してみたい。

③ 畠山義忠の歌会主催と幕府歌会参加

畠山義忠家において催された月次歌会の記録の初見は、『草根集』巻二の一八八番歌の詞書「(稿者注、永享元年(一四二九)正月)六日、畠山阿波守義忠家にていつもの事にてまかり侍し頃、続歌ありしに」である。前述のように、『草根集』は、巻二・三が永享元年から六年の日

次家集である。巻一はこうした日次形式ではないが、「いつもの事に」とあることにより、永享元年前後から、恒例の年賀の一環として義忠家で歌会始が行われ、正徹が参加していたと推定される。そして、義忠(賢良)家の月次の三首歌会や続歌は、『草根集』に依拠する限り、長録二年(一四五八)四月六日まで続いた。

正徹は応永二十一年(一四一四)三月一六日頃に出家し⁽²²⁾東福寺に入寺、応永一八年四月以降に東漸健易(南禅寺に退院の後、東福寺塔頭栗棘庵内に一華軒を開く)に師事したとされる。また、寛政一三年(一八〇一)に東福寺霊雲院の天瑞守選が撰述した『棘林志』(東福寺霊雲院所蔵、全五冊)四・「法系諸刹」には、正徹は東福寺の栗棘庵に住持し、栗棘門派の象先会玄(後に東福寺第百四十四世)から法を継いだとする記述がある(但し、「清岩正徹」の記載は本文別筆)。

応永二十一年の四月一七日に管領・細川道欽(満元)主催の「頓証寺一日千首和歌」(『新編香川叢書文芸篇』所収)に六〇首出詠し、正徹歌の五九首が『草根集』巻一に収められる。冷泉為尹の門弟であった正徹が、五山名刹の禅僧として武家歌壇にデビューを果たしたのである。ただ、細川道欽(満元)と正徹とが歌道を介し親しく交わるのは、『草根集』巻一四・長禄二年(一四五八)条の、満元(岩晒院)の三十三回忌和歌に、

(稿者注、十月)十五日、永泰院に古岩晒院道親^(マタ)三十三年とて
右京大夫おはせしかば、経一部かきて焼香にまかりいでし、彼
経のうはまきに書付し歌

七とせは身にそふ影とともなひし人の世てらす法のともしび

岩晒院に歌道によりて七十年のほどそひ侍しこと也

(一〇五四四)

とあることから、応永二十七年以後のことと推定されている。⁽²³⁾恐らく、同

じ時期から、義忠も歌会始等を主催し、これに正徹が参加するようになったものと思われる。応永期の能登守護は満慶であったが、元来、能登畠山氏と栗棘庵は、能登国志津良庄が庵領であった（後述）ため、関係が深かった。⁽²⁴⁾生涯に互り義忠と正徹とが交誼を深めたのは、義忠が正徹の入寺していた東福寺栗州庵の大檀那であった（後掲『薩涼軒日録』長禄二年四月八日条）ことに大きく起因しよう。

無論、『草根集』等から知られる正徹の武家との交際圏は幅広く、管領・守護大名に限ると、細川満元・持元・持之・勝元・持賢・頼久・氏久、山名熙賢・持熙・持豊（宗全）・教豊・勝豊・教之・政清、斯波茂有・義健・持種、一色教親、武田信賢、赤松満祐（性具）・教貞・伊勢貞親らの歌会に参加している。しかし、畠山義忠（賢良）との交流は一七〇数回を超え、他家を遥かに上回るのである。また、義忠の子息の義有、孫の義統の名も見える。

一方、義忠が足利義宣（義教）催行の幕府歌会に初めて参加したのは、正長元年（一四二八）八月二五日であった（『満済准后日記』）。前々月の六月二五日の歌会に加えられたが、故障を申して出席しなかった。『建内記』同日条には、「（前略）畠山大夫人道嫡子被仰試、故障申云々」とあり、あくまで「試」であった。しかしながら、永享三年二月二七日の歌会では、頭役を務めており（『満済准后日記』）、義宣が義忠を、歌人として室町殿歌会への出詠に適うと認めていたことは明らかである。永享四年正月一三日の幕府の歌会始には、歌道家では、飛鳥井雅世・雅永・雅親・上冷泉為之、公家では、正親町三条実雅や三条西公保ら、武家では、義忠の他、山名時熙、細川持之・持賢・持春・満経、一色持信、斯波義淳、赤松満祐・満政・義雅ら、僧侶は実相院義運、堯孝、満済が出詠している（『満済准后日記』）。幕府歌会における武家の出詠者の地位が、いずれも、管領家、及びそれに次ぐ御相伴衆であったことは注意される。

義教の御相伴衆の交名は、『永享以来御番帳』の永享三年の「御相伴

衆」の項により知られる。筆頭の四人のみを掲げると、山名常熙・一色義貫・畠山満慶・赤松満祐である。⁽²⁵⁾幕府歌会始の出詠者と『永享以来御番帳』の交名とは、山名常熙（時熙）、赤松満祐の二名が一致する。一色持信と義貫とは兄弟である。ちなみに、前節で触れた一色教親は、持信の子である。畠山満慶と義忠は親子である。『永享以来御番帳』『御相伴衆』の項には畠山義忠の名も見え、義忠は御相伴衆であった。幕府歌会に参加した武家の出自と御相伴衆のメンバーが合致することが確認される。

そもそも、御相伴衆とは、將軍の社寺や諸大名邸などの御成に際して催される酒食の饗膳に陪食を許される者であった。だが、義満期以降、管領が相伴するケースは無くなる。義持以降になると、細川・畠山・斯波の三管領、及び、山名・赤松・一色・京極・阿波細川・能登畠山の有力守護大名により構成される御相伴衆が將軍の御成に際して相伴することが慣例化し、さらには幕政運営の枢機に参画するようになった。⁽²⁷⁾

以上のように、室町殿の幕府歌会に武家で出詠し得たのは、管領家と御相伴衆の有力守護であった。これは、武家と僧侶が集う歌会的人的構成を考察する際に重要な事象である。

前述の永享四年（一四三二）正月一三日の室町幕府の歌会始では、僧侶として実相院義運・堯孝・満済が出詠している。だが、堯孝は実相院義運・満済と異なり、貴顕出身の門跡ではない。これは、堯孝が二条派の頼阿に由来する、仁和寺の常光院を伝領・相承した歌道流派名門の出身であったからである。また、夙に指摘があるように、父堯尋に春賀丸という名の子がいて義満の童形であった由が『吉田家日次記』応永八年（一四〇一）三月一二日条に見える。⁽²⁸⁾そして、この春賀丸が堯孝と同一人物であるかは不明であるが、堯尋とその子達が將軍義満と親しかったと推測される。実際、堯孝は父堯尋と同様、法印権大僧都に至って権門に親近していた。例えば、永享三年一〇月二五日に、將軍義教が、飛鳥井雅世・雅永とともに、常光院坊を訪れ、三十首歌会を催している（『満

済准后日記」。

永享五年八月に義教は、勅撰集撰進の意向を固め、後花園天皇に奏請した。二十一代集の掉尾『新統古今集』である。撰者は飛鳥井雅世に決定し、開闔は堯孝が務めた。正徹は、永享五年八月に、義忠邸において、

(稿者注、八月) 廿六日、阿波守家の月次に(二首略)

寄道祝

敷島の道行人も玉ほこの玉みがくべきたのみある世ぞ

勅撰の事、必定ありし比也

(『草根集』巻三・二〇一二)

と、勅撰集入集を祈願した詠を詠んでいる。だが、よく知られるとおり、永享一一年に雅世が奏覧した『新統古今集』に正徹の入集が叶わなかった。⁽²⁹⁾ところが、義忠は、

題しらず

源義忠

住みなるる人の心は知らねどもやがて寂しき山のかげ哉(一八三八)

が「雑中」に入集を果たしている。背景に、義忠の幕府歌会への参加や自邸歌会における雅世との深い親交が存したことは想像に難くない。義忠は、雅世(法名祐雅)と生涯親しかった。前掲『堯孝法印日記』の賢良家月次歌会始に雅世は題者として出席している。また、『草根集』巻八・宝徳二年条に「(稿者注、一二月) 十日、修理大夫家の月次再興ありて、飛鳥井中納言などいでられしに」(六七〇二・詞書)とある。文安・宝徳期に祐雅が賢良家の歌会の常連のメンバーであったことが推測される。

このように、御相伴衆の義忠は、幕府歌会を通じて守護大名や歌道家の雅世、及び堯孝との親交を深めた。一色教親との交流は、前掲『堯孝法印日記』に明らかである。『堯孝法印日記』には、細川道賢の名も見え、

義忠は、守護大名クラスの武家と幅広く交際し、自邸の歌会への参集を促したと思われる。一方で正徹との関わりは、遅くとも永享元年から存した。そして、賢良と正徹を中軸とする文芸圈を考察する際、看過出来ない問題に五山僧との関係がある。次節では、文安五年(一四八八)に賢良が主催した『畠山匠作亭詩歌』を対象として賢良の交友圈をさらに深く掘り下げ、五山僧との交際について探究してみたい。

④『畠山匠作亭詩歌』の成立と人的構成

『畠山匠作亭詩歌』とは、文安五年(一四四八)十一月三日(『亜塊集』四六四・詞書に依る)に賢良が、自邸に書き付けた十二月月の障子紙に、当代歌人と五山僧の禅僧に和歌と漢詩を詠ませた催しである。現存伝本は二一本が確認される。⁽³⁰⁾高松宮本『十二月絵詩歌畠山亭』を底本とする『新編国歌大観 第十巻』の翻刻本文は、詞書や和歌の題を欠いている。だが、宮内庁書陵部(以下「書陵部」と略称)蔵『十二月月画賛和歌』(C八・四二)など数本には、冒頭に「源朝臣家の障子の絵に人々によませし歌」と詠歌状況を記し、各和歌には、高松宮本に記される「新正梅」以下の題の代わりに「正月 人の家に梅の花の咲たる所」などの詞書がある。⁽³¹⁾国立公文書館旧内閣文庫(二〇一・一五四四)本など、外題を「室町殿障子画十二月詩歌」とする伝本が存在するため、研究史的に長い間、主催者が賢良であるか判然としなかった。だが、『松下集』五九三番歌の詞書(前略)当初畠山修理大夫入道賢良家に、障子絵に十二月詩歌を入々にす、め給」が有力な根拠となり、賢良と確定している。漢詩と和歌の作者をそれぞれ月の順に掲出しよう(上が漢詩作者・下が和歌作者)。

一月 景南英文・飛鳥井祐雅 二月 愚極礼才・飛鳥井雅永
三月 竺雲等連・下冷泉持為 四月 以篤信仲・飛鳥井雅親

五月	春林周藤・細川道賢	六月	瑞溪周鳳・一色教親
七月	心田清播・正徹	八月	雲章一慶・堯孝
九月	存耕祖黙・常闇	一〇月	瑞巖竜愷・畠山仙空
十一月	東沼周巖・畠山賢良	十二月	華岳建胃・正眺

これにより、文安五年段階の畠山賢良の交際圏が知られ、その意味でも『畠山匠作亭詩歌』は重要な資料である。まず、和歌作者について検討してみよう。飛鳥井祐雅・雅永・雅親、下冷泉持為の四人は、歌道家の専門歌人で、賢良は少なくとも、幕府歌会で接合している。細川道賢と一色教親がそれぞれ歌会を催し、お互いに出詠し合っていることは、前掲『堯孝法印日記』に明らかである。先述のように、幕府歌会にも出詠しているから、賢良とはそこでの接合も想定される。これら幕府歌会を通じた結びつきを「幕府系」とすると、堯孝も幕府歌会に参加していたから、幕府系と位置付けられる。以上の六人が幕府系の人物である。それ以外の人物は、『草根集』に見える賢良や正徹主催の歌会への出詠者である。畠山仙空（持純）は賢良と同族である上、自ら歌会を盛んに催行したことが『草根集』により知られる。⁽³²⁾正眺（広）は正徹の愛弟子である。そして、『堯孝法印日記』によれば、常闇は、文安三年（一四四六）の畠山家や一色家の当座歌会への出席が確認され（前掲）、そこで正徹との関係も形成された。正徹も含めこれら四名を「正徹系」と仮称しておく。

「正徹系」とした歌人達は、幕府歌会に参加できる出自や身分ではなく、幕府系の出詠者とはいわば対極にあった。賢良が自邸で歌会を盛んに催し、正徹らが参加していたからこそ、『畠山匠作亭詩歌』において、賢良は彼らを掬い上げ、「幕府系」の人物と同席させることができたのだ。しかし、『畠山匠作亭詩歌』を基準として、出詠者を「賢良高野山参詣路次和歌」と比較すると、円雅・寿阿・正眺・心恵・忠英の名が見えな

い。また、心敬『ひとりごと』には、「まことに、永享年中の比までは、きらくしき会所々に侍しなり」とした上で、公家・武家の歌会の主催者を挙げ、「其作者先達」として飛鳥井雅世から東氏数までの名を掲げた後に「近藤入道・宗砌法師・知蘊・外郎・常佐以下数をしらざりし」と述べる（前掲注⁽¹⁶⁾に全文所引）。近藤入道以下の五人は、「外郎」を除き『堯孝法印日記』の賢良家歌会への出詠者と合致する。賢良家月次歌会に出詠していたと思われる人々を、『畠山匠作亭詩歌』は一様に除いている。では、近藤入道・宗砌法師・知蘊・常佐とはどのような身分の人物なのだろうか。

心敬『ささめごと』には、「其後、永享の比より世に知られぬるは、宗砌法師・知蘊法師などなるべし。彼等は清岩和尚の下にひさしく候侍て、歌の道をも知れるにや」と前掲『ひとりごと』に照応する記述が見える。智蘊は、俗名親当・俗称蜷川新衛門で、伊勢氏の被官として政所公役、京都沙汰人を務める。宗砌は、姓を高山、民部を称し、それは宗砌から伊勢国司（北畠教具）に贈った『古今連談集』三卷（『古典文庫』八五所収）の各巻末の自署「高山民部入道沙弥宗砌」によって明らかである。但馬守護山名氏の重臣であった。⁽³⁴⁾近藤入道は、『堯孝法印日記』に「常熟近藤入道」とあるが、『文安年中御番帳』『永享以来御番帳』に「近藤筑前守」とある。近藤氏が奉公衆の家柄であった可能性がある。常佐の出自は『堯孝法印日記』以外他文献に名が見えず不明である。

このように、『草根集』に見える賢良家歌会の出詠者は、多くが武家出身で、出家遁世後に歌人・連歌師として活躍した人物であった。そして、彼らは、賢良家の例年の月次歌会に常連として出詠していた階層と推測される。

『畠山匠作亭詩歌』は、この賢良家の月次歌会とは異なり、歌道家・守護大名の人物が多く出詠した。御供衆クラス（前掲注⁽³²⁾参照）の畠山仙空が出詠しているのは、自邸における歌会催行・出詠など歌人として

の実績や力量に配慮したためであろう。正徹の門弟では、招月庵を継いだ、いわば一番弟子の正眺(広)のみを出詠させているのも注目してよい。逆に、「賢良高野山参詣路次和歌」では、歌道家・守護大名の人物を除外するのみならず、賢良家の月次歌会の常連と思われる近藤入道・宗御法師・知蘊も参加させていない。飽くまで正徹・堯孝の門弟筋の歌僧に限定しているのである。

次に、漢詩の出詠者は、殆どが、後に横川景三『百人一首』に入集を果たした臨済宗の名僧である。そして、『畠山匠作亭詩歌』は、従来、正徹の側から研究が進められてきたため、漢詩作者の五山僧と賢良や正徹ら歌人との関わりが必ずしも明確ではなかった。特に、主催者の賢良の視点から漢詩の出詠者を再検討することにより、『畠山匠作亭詩歌』の成立背景や全体像がより鮮明になることが期待される。次節では、この賢良と五山僧との関係に焦点を当て論述を進めてみたい。

⑤『畠山匠作亭詩歌』出詠の五山僧と賢良

『畠山匠作亭詩歌』の作詩の五山僧は、臨済宗聖一派の東福寺・南禅寺関係者と夢窓派相国寺関係者に分かれる。賢良は、その双方に有力な人脈を持ち、正徹も東福寺栗州庵の出身の禅僧として知られていた。今、簡略に、作詩の五山僧を、聖一派と夢窓派に分け整理してみよう(瑞巖竜惶は黄龍派であるが、建仁寺第七十四世・南禅寺第百八十一世を歴任しているから、夢窓派に近かったといえる)。

聖一派：景南・愚極・存耕・華岳・雲章
 夢窓派：東沼・心田・瑞溪・春林・竺雲
 (黄龍派)：瑞巖

一見、聖一派と夢窓派が拮抗しているようであるが、『臥雲日件録拔尤』により知られる夢窓派の瑞溪の交友圏の幅広さと学識の深さは特筆される。また、聖一派の南禅寺の景南は、足利義教の信任を得て活躍し、二人は、当時の五山叢林の双璧と見做し得る。

まず、注目されるのは、賢良が正徹のかつて入寺していた東福寺の塔頭栗棘庵の大檀那であったことである。やや時期は下るが、『蔭涼軒日録』長祿二年(一四五八)四月八日条に、

八日、栗棘庵御成、前点、畠山修理大夫殿、以為檀那故御相伴被参、
(足利義政)
 蓋田例也、常喜庵曹丘和尚、為院領還付被献盆香合高檀帟、盆、段子、御小袖三重、高檀紙、杉原十帖、栗棘庵被献之、
(賢良)

と見える。足利義政の来訪に際して、畠山賢良が檀那として御相伴役を務めている。「蓋田例也」の記載から、將軍の来寺に際し賢良が相伴する先例が存したことが窺われる。実際、『草根集』巻八に依ると、宝徳二年(一四五〇)二月二四日に賢良と正徹が東福寺栗棘庵を訪れ、次いで常喜庵において花本和歌を詠んでいる。以下に本文を掲出しよう。

(稿者注、二月)廿五日、東福寺栗棘庵に修理大夫いでられし次に、常喜庵の花さかりにし木本にて、題をさぐりて
(畠山賢良)

朝尋花

桜花つゞく山ちをこえゆけば今朝ぞ雲井をかよふまほろし

(六二二二)

夜思花

世にひろきよはの嵐の花さかり心ちおほふ袖はせばくて
(マ)

(六二二三)

詞書に「題をさぐりて」とあるとおり、複数の出詠者による探題歌会であった。宝徳二年に正徹がどこに草庵を構えていたかは不明であるが、宝徳三年頃から頻繁に草庵月次会が催し始められていることから、春日西洞院に住んでいたことが推測されている⁽³⁵⁾。元来、能登畠山氏と栗棘庵の関係は、能登国志津良庄が庵領であったため、賢良父の満慶の代から存した^(前略)。応永二六年(二四一六)十一月七日に將軍足利義持が栗棘庵に、庵領の能登国志津良庄と京都安居院東頼敷地の段銭以下諸公事・臨時課役などの免除を行っている^(東福寺霊雲院蔵『棘林志』五「什物雜記」所収「將軍家勝定殿安堵状」)。この事象に関しては、当時の一連の五山禅院領への室町幕府の保護政策の範囲で捉えられる一方、御相伴衆の満慶^(賢良父)の口入が想定されているのも首肯できる⁽³⁷⁾。

次に、『臥雲日件録抜尤』によると、賢良と端溪周鳳は宝徳二年の時点で交流があった。すなわち、『臥雲日件録抜尤』宝徳二年八月七日条に、

七日、——東禅景南和尚来訪、因曰、每思和尚高風、額頭汗出、蓋^(周鳳)以余久退去也、^(賢良)(中略)畠山及瑞溪久不出之事、且曰、門中尊宿、若^(畠山持国)有一書、則当与管領相謀、強起之云々、

とある。賢良が、端溪が長く相国寺寿徳院に隠居していることを歎き、管領畠山持国と相諮つて再び出世させようとしていることが、景南英文による談話として記されている。また、端溪の漢詩集『臥雲藁』(『五山文学新集 第五巻』に依る)に「官閣早梅 畠山将作席」と題される七言律詩が収められる。『草根集』巻八・宝徳二年条に、

(稿者注、六月)廿二日、修理大夫家にて、長老達会合ありて、官閣早梅といふ題にて詩をつくられしに、この題にて歌をもよむべしとありしに、よめる

梅が、も雪のしづくの玉すだれあけぬ年立やどの衣手 (六五八五)

と見え、詠詩の状況が分かる。「長老達会合」とは、『臥雲藁』の記載をも踏まえると、端溪ら五山の長老達が集った漢詩会のことであろう。そして、その当座に正徹が同席し、和歌を詠むよう命じられたのである⁽³⁸⁾。当時の賢良家における雅会の具体相が窺われる貴重な資料である。

賢良はこうした雅会以外にも、自邸において相国寺の歴代の高僧と深く関わっていた。例えば、『臥雲日件録抜尤』享徳元年閏八月一〇月条に、

十九日、——鹿苑院寄短札来、披而見之、前日将作宅所問、天台宗所談道前・道中・道後之語也、疏記三下云、十地为道前、妙覺為道中、證後為道後也、——

と見える。竺雲等連が賢良邸において訊ねた、天台宗という「道前・道中・道後」の語について、瑞溪は『疏記』三下の叙述を踏まえ返答を書き付けている。賢良が竺雲と親しかったことは、永享四年(一四三二)六月二十七日に没した賢良父の満慶の肖像画に寄せた賛と序である「勝禅寺殿真源大居士肖像贊並序」(『東京大学史料編纂所蔵『叢林文藻』所収)により知られる。識語には、「皆享徳初元歲次壬申十一月古辰／前南禅竺雲等連 頓首拜書／于□季鹿苑院」とある。享徳元年(一四五二)十一月に当時相国寺鹿苑院の塔主であった竺雲が賛と序を揮毫したのである。序の末尾に「…令嗣匠作義忠、法名賢良、別称芳彦、命工俾肖其容、且夕排膽、以慰終天孺慕之意、今乃命予繫之」とあり、賢良の依頼によって制作されたことが分かる。竺雲は、永享七年(一四三二)八月に相国寺第四十七世に住し(『相国前住籍』)、文安初年頃に南禅寺に昇住している(『南禅住持住籍』)。そして、宝徳三年頃には相国寺鹿苑院の塔主に遷任し、康正二年(一四五六)に及んだ(『相国前住籍』『扶桑五山記』)。前

述のように、前掲「勝禪寺殿眞源大居士肖像賛並序」を揮毫した享徳元年には、竺雲は相国寺鹿苑院の塔主であった。これら宝徳・享徳年間に確認される、賢良と端溪・竺雲・景文との関係は、『畠山匠作亭詩歌』成立の文安五年頃から続いていたと推測される。

試みに文安五年前後に絞って相国寺の僧籍の動向を探索すると、春林周藤が文安四年七月に前任者の瑞溪の懇請により相国寺鹿苑院塔主に就任し（宝徳三年春まで在任。『臥雲日件録抜尤』）、同年八月に東沼周巖が第五十四世に住している（『相国前住籍』）。また、相国寺の開山塔崇寿院の塔主であった瑞溪が、同寺鹿苑院の塔主に任じられたのは文安三年七月である（『相国前住籍』）が、翌年七月に辞し、崇寿院の塔主に遷任している（『相国前住籍』）。以上、文安五年前後に相国寺の要職にあった五山僧が『畠山匠作亭詩歌』に参加したことが証される。よって、賢良が従来から有していた東福寺・南禅寺の禅僧との知遇に加え、瑞溪ら相国寺の関係者との結びつきを通じて漢詩の出詠を依頼し、作者を構成したと考えられる。

このように、『畠山匠作亭詩歌』の成立の背景には、賢良と瑞溪・春林・東沼らの五山僧との繋がりがあった。賢良と正徹を中核とし五山叢林に及ぶ文芸圏は、宝徳年間に入り『瀟湘八景歌』を生む。次節では、『瀟湘八景歌』の成立過程の考証を通じて賢良と正徹の交際圏の広がりを叙述してみたい。

⑥『畠山匠作亭詩歌』から『瀟湘八景歌』へ

宝徳三年（一四五二）に、南禅寺の景南英文が『瀟湘八景歌』を賢良・正徹・堯孝ら八人に勧進した。景南は瑞溪周鳳と詩文の上で親交厚く、『臥雲日件録抜尤』からは、生涯に互り往来・切磋した様子が窺われる。当該資料は、書陵部蔵『歌書集成』（二五五―一〇九）などに収められ広く

知られるが、いずれも和歌のみである。ところが、『草根集』巻九・宝徳三年条には、

七月朔日、南禅寺東禅院景南和尚之勧進にて、八景詩歌の色紙を給はりし、自分之外人数、歌方、飛鳥井中納言入道祐雅、息中納言雅親、冷泉中納言持為、畠山入修理大夫入道賢良、細川右馬頭入道道賢、堯孝法印、愚弟正広

遠浦帰帆

沖津風たつ夕浪にとぶ鳥のかへるを見れば舟にいさり火（六九八七）

とあり、当座では、漢詩も伴っていたことが知られる。参加者は、詞書に見える、正徹及び飛鳥井祐雅・雅親・下冷泉持為・畠山賢良・細川道賢・堯孝・正広の内、祐雅の名が書陵部蔵『歌書集成』には見えず、代わりに桃華野人（一条兼良）が参加している。これについては、最初、祐雅に依頼する予定だったのが、何らかの事情で兼良に代わったものと推測されている。⁽⁴⁰⁾この兼良以外は全て『畠山匠作亭詩歌』の作者である。

『瀟湘八景歌』の折の漢詩として推定されているのが、書陵部蔵『待需抄』巻六（二六―四）所収の『瀟湘八景歌』より直前の八景詩である。作者は、景南英文・雲章一慶・東沼周巖・竺雲・端溪・端溪周鳳・東旭等輝である。東丘文昱と東旭等輝を除いた六名が、『畠山匠作亭詩歌』の出詠者と同様である。和歌に「逍遙院入道前内大臣」と注記があり、それが三条西実隆の家集『再昌草』の明応一〇年（一五〇二）の詠と一致するのが問題となる。だが、前述した端溪の交友圏、及び『畠山匠作亭詩歌』の作者から推測すると、『瀟湘八景歌』の漢詩と考えても無理は無い。さらに、前掲『待需抄』所収の問題の八景詩の内、端溪の、「平沙落雁」題の詩、

宜飛無意問帰程、湘水南辺下晚晴、聖主上林猶射獵、青雲不似白沙平、

が、「平沙落雁図」と題し、端溪周鳳の『臥雲臺』に見える。長祿二年（二四五八）一〇月一七日に死去した三条西実連の哀悼の詩の直前にあり、配列の上から時期的に符合する事実も傍証となる。

成立事情に関しては、正広の『松下集』五九八番歌・詞書に、出詠歌が書陵部蔵『歌書集成』とは異なっているものの、本詩歌の記事が見え、そこには「宝徳三年七月朔日、南禪寺東南院景南和尚のすゝめにて、八景を書侍る屏風に、詩歌を色紙にかきてをされ侍るに」とある。よって、『草根集』の詞書をも含め勘案すると、勸進者の景南が本詩歌の主催者であり、同時に、南禪寺東禪院の瀟湘八景の屏風に押すための色紙を提供したと考えられる。

『瀟湘八景歌』も賢良・正徹と五山僧を結ぶ作者圈の中で制作された資料として重要な意義がある。瀟湘八景を五山僧が好んだことはよく知られるが、一方の歌人は、『畠山匠作亭詩歌』の実績を踏まえ、賢良主導で出詠者が決定したものと思われる。そして、ここにも、賢良・正徹らの歌人と五山叢林の名僧を中核とする雅会のサロンの存在が想定される。すなわち、有力守護の賢良は、歌人と五山僧が集う雅交の「場」を提供する後援者的な役割を果たしていた。そして、『草根集』には、確かに歌会催行記事が目立つが、前掲の『草根集』六五八番歌に見える「長老達会合」のように、漢詩と和歌がセットとなった雅会も催されている。『畠山匠作亭詩歌』と『瀟湘八景歌』が漢詩を伴っているのも会得される。

おわりに

以上、本稿では田中本『鷹歌等』所収「賢良高野山参詣路次和歌」の発掘と考証を端緒に、賢良家主催の歌会の『畠山匠作亭詩歌』や『瀟湘

八景歌』の成立を支えた人的交流に焦点を当て、賢良の交友圏の実相を考究してきた。

「賢良高野山参詣路次和歌」は、文安三年を軸とする前後二、三年の間の成立と考えられる。そして、出発から旅程ごとに各人が名所詠を詠んだ歌稿が原形であったと思われる。また、その催行の背景には、賢良家・一色家の歌会において歌道家や正徹の門弟筋を中心とする歌僧や連歌師にまで参加者の裾野を広げていた事実が存する。

これを踏まえ、最後に賢良が主催・出詠した和歌会（並びに漢詩会）の「場」の機能を、階層ごとに①から⑤に整理しておこう。

①幕府歌会：將軍家の公的行事。武家の出詠者は、管領家・御相伴衆クラスの守護大名に限られる。一方、公家は歌道家や堂上家が参会するため、義忠（賢良）は武家・公家・門跡僧侶の名門と幅広く知遇を得ることができた。

②守護大名あるいは堯孝主催の歌会：賢良や正徹も参加。機能的には「③義忠（賢良）家歌会」に類似する。

③義忠（賢良）家歌会：在京守護の御相伴衆クラスと正徹ら地下の歌僧とが交流する役割を果たした。正徹らにとっては詠歌の「場」が提供されたが、一方の守護大名にとっては、プロの法体歌人との接触により和歌の素養や技術を高め得る効用が存したと思われる。無論、①幕府歌会と異なり、②③の歌会の「場」には、身分や地位に必ずしも限定されず参集できた。そして、『畠山匠作亭詩歌』や『瀟湘八景歌』に結実する和歌と漢詩とがセットで詠まれる文芸サロンの母体となった側面も注目される。

④「賢良高野山参詣路次和歌」：正徹と招月庵流の門弟を中心に、堯孝や心恵（敬）も参加した。「③義忠（賢良）家歌会」同様に、冷泉派・招月庵流、二条派・常光院流の異なる歌道流派に属する歌人の共存・参会が賢良の統率力により図られている。

⑤『畠山匠作亭詩歌』や『瀟湘八景歌』等……②から④の歌会で培った賢良の人脈に加え、東福寺を初め相国寺・南禅寺の五山僧を集め漢詩の出詠者を構成。正徹が和歌しか詠まなかった(『栗棘志』二・列伝、正徹『なぐさみ草』)のに対し、賢良は和歌会と漢詩会を連続した「場」で催し両者を結び付けた。人的構成の面でも、正徹ら招月庵流の禅僧と五山叢林の交流が活性化される役割を果たした。

他の守護大名に比し特筆されるのは、③以降である。義忠(賢良)は、和歌の守護神の住吉・玉津島社を訪れる数奇心に加え、東福寺塔頭栗棘庵と正徹の招月庵と関係が深かったため、階層やジャンルを越えて多様な文芸活動を展開したのである。

註

(1) 佐藤恒雄「正徹詠草」(永享六年)について『国語国文』第四五巻・四号昭五一・三)で紹介と精察が成された。それを受けて稲田利徳「正徹の研究 中世歌人研究」(昭五三・笠間書院)第三篇第一章第二節が所収歌の特性や資料的意義について考究している。

(2) 天理大学付属図書館蔵「永享五年詠草」(仮称、外題「招月正徹詠歌」)は、井上宗雄「中世歌壇史の研究 室町前期」(昭三六初版、昭五九改訂新版・明治書院)が初めて紹介し、谷山茂・国枝利久「正徹詠草―付・正徹百首」(『文学・語学』第二八号、昭三八・六)、及び前掲註(1)稲田著書の第三篇第一章第一節に論究がある。大東急記念文庫蔵「永享五年詠草」(仮称、外題なし)については前掲註(1)稲田著書・第三篇第一章第三節に紹介と考証がある。

(3) 前掲註(1)稲田著書第三篇第一章第一節中の指摘。

(4) 国立歴史民俗博物館資料目録「4」田中穰氏旧蔵典籍古文書目録「国文学資料・聖教類編」(平一七・国立歴史民俗博物館)に一五丁裏から一六丁表の写真と書誌解題が備わる。なお、人間文化研究機構連携展示「うたのちから―和歌の時代史―」(会期、平一七・一〇・二一―一・二七)において出展され、展示図録「うたのちから―和歌の時代史―」(平一七・国立歴史民俗博物館)に一六丁表の写真と解説が掲載される。

(5) 河合政治「中世武家社会の研究」(昭四八・吉川弘文館)、米原正義「細川満元と北山文化」(『國學院雑誌』第八〇巻・二号、昭五四・一一)。

(6) 「十二月絵詩歌畠山亭」(外題、H一六〇〇―一四二一ム一〇二)、『瀟湘八景

詩歌」(外題、H一六〇〇―一四七七一ム一七一)。

(7) 井上宗雄「中世教訓歌略解題付・教訓歌小考」(『立教大学日本文学』第二四号、昭四五・七)。山本「『鷹百首類伝本概観の試み』(『国文学研究資料館文献資料部調査研究報告』第一八号、平一〇・六)。

(8) 該本は、諸所に蔵され、寛永一三年板本も存する。二条良基「嵯峨野物語」にも「近代鷹をこのむ人、公家にまれなり、西園寺相国公経、常盤井太政大臣実氏、入道相国実兼けしからずこのみちの好士也」とあり、鎌倉期に西園寺家の人々はみな鷹を好んだ。なお、前掲註(7)井上論文参照。

(9) 久松潜一編『歌論集』(二) 中世の文学」(昭四六・三弥生書店)所収。また、解題(佐藤恒雄・福田秀一執筆)参照。

(10) 『私家集大成 第五巻 中世』、「草根集」IV「解題」、前掲註(1)稲田著書第二篇第二章を参照した。

(11) 例えば、建武三年(一三三六)の「住吉社法楽和歌」、暦応二年(一三三九)の「春日奉納和歌」等の巻末に奉納の月日が記されており、南北朝期に既に先例がある。

(12) 前掲註(1)稲田著書・第二篇第二章第二節。

(13) 前掲註(1)稲田著書・第二篇第二章第二節。

(14) 常閑の詠歌事蹟は明らかではない。だが、心敬「ひとりごと」に「清厳和尚・堯孝法印・春日三位入道常閑」とあるのに加え、『応仁略記』に「春日の三位常閑・招月庵・常光院」と見える。正徹・堯孝と並称される、指導者的な地位にある専門歌人であったことが窺われる。東常縁筆録の『東野州閑書』に畠山持純の質問に常閑が答える箇所があり、和歌について深い学識を有していたことは確かである。

(15) 円雅は、『頭伝明名録』に「堯孝門弟、住東山、号岩倉法師、号実祐上人、号常光院、新統古今集作者隠名也、見長録 孝」(読点稿者、以下同様)とある。『新統古今集』に隠名で一首入集(二〇八六)。「円雅集」に「嘉吉のころ、畠山の匠作の会に五月蟬といふことを」(一八)とあり、嘉吉年間(一四四一―三)に賢良(義忠)家の歌会へ出詠していた。堯憲「和歌深秘抄」に「一、満願寺殿(堯孝之事也)古今集相伝の人数承度候、先師に古今伝授の事御尋候注進候」とある中に、「畠山播磨守円雅」と見え、畠山の一族と推測されてきた。以上、井上宗雄「堯憲・堯惠・円雅・常縁―常光院堯孝の門流」(『和歌文学研究』第一〇号、昭三八・一〇)、稲田利徳「新統古今集の読入しらず歌をめぐって」(『中世文学研究』第二号、昭五一・七)、前掲註(2)井上著書参照。ところが、『文安年中御番帳』の奉公衆の四番頭人に「畠山播磨守」とあるのが近時新たに見出され、円雅が奉公衆の家柄であった可能性が出て来た。

(16) 常佐は、「ひとりごと」に「其席作者先達黄門・冷泉黄門・畠山匠作・同名阿波守・同名左衛門佐・一色左京大夫・武田大膳大夫・小笠原備前入道・東

- (16) 下総守・近藤入道・宗師法師・智蘊・外郎・常佐」と見える。だが、寿阿の名は、『顯伝明名録』や『ひとりごと』に見出されない。『堯孝法印日記』に、前掲の一世教親家・賢良家の四月の月次三首歌会と当座五十首歌会の他に、二月・三月の同じく月次三首歌会と当座五十首歌会の左注に「題者予、読師同、講師寿阿、人数如先々」(八三・九〇、二〇・二六)と記される。畠山持純家の四月の三十首歌会の左注にも、「出題予、読師同、講師寿阿(以下略)」(二五六・一六〇)とある。堯孝が題者か読師であった歌会で講師を務めており、堯孝の信任を受けていた人物であることは確かである。
- (17) 『顯伝明名録』に「正徹弟子、若州住人井上能登守」とある。畠山氏被官で歌道と連歌に心を寄せていた井上氏の統英の父・統英の祖父に比定する説がある(米原正義『戦国武士と文芸の研究』(昭五一・桜楓社)第一章)。統英は義統被官、総英は義経被官のため、偏諱を受けたとされる。それぞれ「文明十五年十一月二日/賦何船連歌」(大永三年九月廿一日/賦何路連歌)の連歌である。そして、忠英は、康正元年(一四五七)九月七日催行の尊経閣文庫蔵『武家歌合』の作者である。なお、「賢良高野山参詣路次和歌」の出詠者で『武家歌合』に参加しているのは、忠英の他、正徹・心敬・正広がいる。
- (18) 前掲註(17)米原著書に指摘がある。
- (19) 『康富記』宝徳三年(一四五二)九月二七日条。
- (20) 野毛孝彦「心敬年譜」(『文芸研究』一六号、昭四一・一〇)、前掲註(1)稲田著書は、正徹が三井寺三仏地院へ向いた記事『草根集』により年次別に集計したところ、宝徳年間に集中することから、「三井寺仏地院の一四度の歌会で一首も不の札がなかった事件も、宝徳年間のころではなかったと推定される」と述べる。「前半の十三カ月間、無敗の年も、これに近い頃の出来事であったとみて、それほど大きな支障とはならないであろう」とする。
- (21) 住吉大社・玉津島神社の信仰については、「和歌の神としての住吉の神―その成り立ちと展開―」(『すみのおえ』第一七五号、昭五九・二二)、後に『古今集以後』(平一二・笠間書院)、三輪正胤『歌学秘伝の研究』(平六・風間書房)、拙稿「二条為世の玉津島信仰をめぐる」(『国文学研究』第一三四集、平一三・六)。
- (22) 正徹の出家時期については従来諸説あったが、『弘文莊名家真蹟図録』(昭四六・弘文莊)掲載の「自筆和歌懷紙」「正徹/のちの世をなけく涙といひなしてすみ/の心にあつしてつる/応永廿一年三月十六日のあかつきの口すさめ也」の考証により、応永二年三月一六日が定説となった。田中新一「正徹の出家年時―正徹研究ノート―」(『国語と国文学』第五四卷三号、昭五二・三三)参照。なお、正徹が応永一八年四月以降に正徹が東福寺塔頭栗棘庵一華軒の東漸健易に師事したとするのは、東京大学史料編纂所蔵『東漸和尚語録』の透写本に基づく(前掲註(1)稲田著書第一章第二節)。だが、正徹は応永三一年九月五日には、六角東洞院と高倉の間北頼辻子奥に草庵を構えており(『松下集』五九〇詞書)、遅くともこの年までには、東福寺栗棘庵を出ていた。翌年春日西洞院の南頼に転居する(『松下集』五九一詞書)が、この春日西洞院の南頼の庵室こそが正徹没後、正広、正般に伝領された招月庵である(『親元日記』文明一五年九月一〇日条・別記「政所賦銘引付」)。前掲註(1)稲田著書第二章第二節に所引。
- (23) 前掲註(1)稲田著書第一章第一節。
- (24) 例えば、前掲『棘林志』は、栗棘庵の開祖の空性について「柳建禮那覺山空性庵主(応永十一年甲申七月十四日/卒、和島領主温井備中守)」と温井氏に比定する。また、空性は、正徹が師事した東漸瑞竜の叔父であった(東京大学史料編纂所蔵「一華東漸和尚龍石裏」)。
- (25) 福田豊彦「室町幕府と国人一揆」(平七・吉川弘文館)の年代考証に依る。また、秋元大輔「室町幕府諸番帳の成立年代の研究」(『日本歴史』第三四八号、昭五三・九)を参照した。
- (26) 二本謙二「中世武家儀礼の研究」(昭六〇・吉川弘文館)の人物比定を参照した。
- (27) 永原慶二「大名領国制」(『体系日本歴史』三(昭四二・日本評論社))、前掲註(26)二本著書等。
- (28) 井上宗雄「常光院堯孝について―伝記・業績及び人物―」(『言語と文芸』第一八号、昭三六・一一)。
- (29) 正徹が『新統古今集』に一首も入集しなかった事象については、古来、天文二年(一五三四)成立の英俊著『多聞院日記』以降、正徹の詠んだ諷刺の和歌が、足利義教の逆鱗に触れ、謫居を余儀なくされたと伝承されてきた。ところが、『松下集』に、
床のうへにも露消し程もなく余所になるこの小田の秋風(六〇二)
此歌は、備前国小田庄とて庵領あり、普広院殿の御時、ゆへなくめしはなされ侍り、御代の後、やがて安堵ありしを、愚身に相続ありて老僧の死去の後、人の訴訟ありて、知行せざり、迷懐の心也
と見えることから、實際は、義教の怒りに触れて小田庄の庵領を没収されたことが判明した。謫居の理由は庄園の没収であった。井上宗雄は、『新統古今集』の撰者・飛鳥井雅世が義教の忌避を察知し、入集を拒絶したとする(前掲註(2)井上著書)。
- (30) 前掲註(1)稲田著書・第三篇第二章第六節。なお、稲田の調査結果に、近時、架蔵に帰した卷子装の一本を加えた。識語に「寛文第九曆孟冬中旬/夫顧蜩蛇之跡染毫終訖/(花押(雅章))」とある。
- (31) 前掲註(1)稲田著書・第三篇第二章第六節。
- (32) 畠山仙空(持純)については、『東野州聞書』にも「畠山(の)阿州」「阿州」と名が見え署名である。しかし、その出自や身分については従来言及が無いため、

(国立歴史民俗博物館外来研究員)
(二〇〇六年三月二七日受理、二〇〇六年一〇月二七日審査終了)

略述しておこう。畠山満慶や義忠が家国男の義深を祖とするのに対して、持純は、同じく家国男の国清を祖とする。だが、義忠までの系譜が管領(基国、義深男)―能登守護(満慶、基国男)と続く管領家畠山氏の有力庶流であるのに対し、国清の子孫はいわば末流である。持純は、国清の孫に当たる持頼男で、『系図纂要』成和源氏十二(国立公文書館蔵旧内閣文庫(一五五―四〇八)本に拠る)には、『右馬頭阿波守／於摂州陽山討死／法名仏空』と注記がある。また、『永享以来御番帳』の永享三年の項には、『四番／畠山右馬頭持純』とあり、御伴衆四番の頭人であった。さらに、『花宮三代記』応永二年一月から三年四月二二日の各条に依ると、持純が將軍義量の近習であり、義量死後は義持に仕えたことが分かる。また、『花宮三代記』の、義量死去後の約二箇月後に当たる応永三年四月二二日条には、故義量奉公の面々が大御所義持に拝謁したことを記し、その中に「阿波守／畠山右馬頭次郎持純」と見える。

(33) 『ひとりごと』本文には「永享年中の比」とするが、掲出の資料の検討から、井上宗雄は「この記述は文安・宝徳頃までの歌壇の様相を回顧していると言つてよい」とする(前掲註(2)井上著書)。前掲註(1)稲田著書もこれを首肯する。

(34) この点については、金子金治郎により、①大東急記念文庫蔵『砌塵抄』の序「其比高山の宗砌と云人有て、世こそりて此道をまなぶ、(中略)幸傍輩なる人なれば、不断に庭訓をうけたてまつる」とあり、②この序文の署名者「忠説」が山名家の家臣であり、③文中で「傍輩なる人」と明言していること、を根拠に論証されている(『新撰寛政波集の研究』(昭四四・桜楓社)第三章)。神宮文庫本『新撰寛政波集作者部類』に「宗砌法師 山名内(以下略)」とあるのも参考になる。なお、奥田久輝「宗砌年譜」(『園田国文』第四号、昭五七・一〇)参照。

(35) 前掲註(1)稲田著書・第一篇第二章第一節。

(36) 今谷明『室町幕府解体過程の研究』第一部第一章(昭六〇・岩波書店)。

(37) 東四柳史明「戦国期の能登畠山氏と五山叢林塔頭―『東福寺栗棘庵文書』の考察―」(『北陸史学』第二十六号、昭五二・一一)。

(38) 前掲註(17)米原著書に指摘がある。

(39) 正徹は、賢良を通じて端溪と交流があった。例えば、『臥雲日件録抜尤』長禄元年(一四五七)六月四日条に、
畠山修理大夫也 三日所ニミエタリ
 四日、――昨日於大夫公宅、与松月徹書記相会、凡学和歌者、尤不欲服、

予就問本朝数事、(以下略)
 と見え、端溪が賢良宅で正徹と面会し、「本朝」の幾つかのことを正徹に聞いている。

(40) 前掲註(1)稲田著書・第三篇第二章第六節。

(41) 前掲註(1)稲田著書・第三篇第二章第四節・第六節、国文学研究資料館編・堀川貴司著『瀟湘八景歌 絵画に見る日本化の様相』(平一四・臨川書店)。

The Warrior World of Poetry during the Bunnan and Hotoku Eras : Shotetsu and the Noto Shugo Hatakeyama Yoshitada

SAKAI Shigeyuki

This paper investigates the people who produced poems in the poetry gatherings held by Hatakeyama Yoshitada, whose Buddhist name was Kenryo, the shugo of Noto Province, and the status and organization of the public officials, warriors and monks who attended these gatherings. The chief source for this investigation is the work entitled “Waka Poets in Journeys, When Kenryo Go Pilgrimage to Sumiyoshi, Tamatsushima, Mt. Koya” (“Kenryo’s Pilgrimage to Sumiyoshi, Tamatsushima and Mt. Koya and People Met on His Journeys”) contained in “Waka Poems on A Hawk” formerly held in the Tanaka Yutaka Collection and now held in the collection of the National Museum of Japanese History. For the purposes of this paper the work will be referred to as “Kenryo Koya-san Sankei Roji Waka” (“Waka Poems of Kenryo’s Pilgrimage to Mt. Koya and Journeys”).

The book “Takauta Nado” formerly in the Tanaka Collection has many items related to the Zen monk poet Shotetsu, including ten new poems by Shotetsu amongst an unorganized assortment of copied poems. However, being transcriptions of written copies of poems from a time near to the editing of Shotetsu’s “Sokonshu” collection of poems, caution is required when looking at these poems. “Waka Poems of Kenryo’s Pilgrimage to Mt. Koya and Journeys” is also included amongst this kind of set of materials. External evidence puts the date of its compilation within three or four years before or after 1446. It is worth noting that the poets who attended these poetry gatherings were confined to Shotetsu and monks who were Gyoko’s disciples. Independent books remaining from poetry gatherings held by Hatakeyama Yoshitada, are “Hatakeyama Shosakutei Shiika” and “Shosho Hakkei Uta”. In both cases the writers of the poems are predominantly those from poet families or shugo daimyo. Using “Hatakeyama Shosakutei Shiika” as a guide and making a comparison with Shotetsu’s “Sokonshu” and Gyoko’s “Gyoko Hoin Nikki”, the poets who attended Kenryo’s poetry gatherings included members of the warrior class who served the bakufu and became active as poets after having turned their backs on their families and the world. These poets were not the same as the disciples of professional poets whose poems were the only ones included in “Waka Poems of Kenryo’s Pilgrimage to Mt. Koya and Journeys”.

“Hatakeyama Shosakutei Shiika” and “Shosho Hakkei Uta” tell us that Kenryo was closely acquainted with Gozan monks. We may conclude, therefore, that he played a supportive role in gatherings at which poets and Gozan monks assembled. The holding of poetry gatherings is mentioned frequently in the “Sokonshu”, where it is written that there were also gatherings that combined Chinese poetry with Japanese waka. The poetry gatherings held by Kenryo served as “venues” for the arts that transcended both class and the different schools of poetry.
